回想の木村荘八

野田宇太郎

木村荘八遺作展が、日本橋白木屋で催されたのは今年の二月。私は相変らずの忙しさで招待日にはゆけなかつたが、開催三日目の二月十九日に半日をその展覧に当てた。それまで木村さんの新作は春陽会が開かれる折に観てゐたが、今度のやうな全生涯にわたる作品展は初めてだし、今後もしばらくは接しられないと思つたからである。

私が木村さんの謦咳に接したのは終戦直後のことで、昭和二十一年七月号の雑誌「藝林閒歩」に「杢太郎の写生『宮松亭』」といふ文章を寄せてもらつたときからである。木下杢太郎の歿後私はその生涯を研究したいと思ひ立ち、全集編纂にもかかつてゐたので、かねてから杢太郎と交りのあつた木村さんに刺を通じた。いはば木下杢太郎を通じてのめぐりあひだつた。話をききにゆくうちに、特別な親しさを感ずるやうになつていつたが、それは木村さんがまた杢太郎の遺した藝術に打ちこんでゐて、杢太郎の若い頃のスケッチを、一枚一枚丹念に摸写するほどの熱心さであつたからばかりでなく、江戸ッ児の藝術家としての木村さんのくだけた人柄と、その身辺にいつも漂つてゐる妙な孤独感に触れたせいだと思ふ。木村さんの孤独感といふのは、やはり全身を藝術に打ち込んだ人にありがちな、情熱の純粋さからくるものであつたらう。私はやがて木下杢太郎研究の一段階として、「パンの会」の研究に没入するやうになり、この「パンの会」の研究がまた木村さんと一層親密の度を加へることになつた。木村さんは昭和三年の春陽会第六回展に「パンの会」といふ三十号の油絵を出品し、それが代表作にもなつてゐることは誰でも知つてゐる。この「パンの会」の製作を木村さんにすすめたのは木下杢太郎であつた。「パンの会」は明治四十一年末から四十五年頃まで下町を中心に催された詩人と画家との藝術交流による日本耽美主義の文藝運動で、明治四十三年十一月からは第二次「新思潮」の同人だつた木村さんの令兄の木村荘太も加つてゐたが、その頃中学を卒業したばかりの木村さんは画家よりもむしろ文学志望で、とくに令兄の加つてゐ

る「パンの会」には非常なあこがれを抱いてゐた。何しろ近代文学としての耽美主義が興りつつあつた時代だから、この影響は木村さんにもはげしいものがあつたらしい。それは木村さんの生涯を一貫した藝術思想であつたと云つてよい。その後大正九年に木村さんは満洲にゐた木下杢太郎と共に遠く大同までも出かけ、杢太郎との共著「大同石仏寺」を出版したこともあつて、「パンの会」の中心人物でもあつたすぐれた科学者であり文学者の杢太郎に深く親しむやうになつた。

昭和時代になつてたまたま「パンの会」の歴史的重要性を痛感しはじめた木村さんは、昭和二年に東京日々新聞が文士と画家を動員して「大東京繁昌記」といふのをリレー式に連載したとき、吉井勇の「大川端」の挿絵を描くことになつた。吉井勇は「パンの会」の一人だつたから、当然その時代のことが書かれ、木村さんはまざまざと若き日のあこがれを呼びさますことになつた。吉井勇の「大川端」の中に「瓢箪新道（じんみち）」といふ一章がある。瓢箪新道といふのは日本橋大伝馬町の一郭の小路の名で、その奥の三洲屋といふ西洋料理店が、明治四十三年十一月の「パンの大会」の会場であつた。いきほひ吉井勇の筆はこの大会の思ひ出に及んだので、木村さんもその挿絵を描いた。この挿絵が木村さんの名作「パンの会」の下絵の役をつとめた。構図は大体翌年の「パンの会」と同じで、テーブルで三味線をひく自画像がはいつてゐるし、椅子にかけた二人の舞妓の姿やその他のモデルのある文士群像もほぼ描かれてゐる。ここで自分の自画像を入れたのは、かねてからのあこがれを創作画の中に生かしたものであるが、またこの様式の風俗画はすでに木下杢太郎も描いてゐて、それは詩集「食後の唄」に挿入されてゐる。他人をカルカチュア風に描いて、そのすみに自分がギターか何かの楽器を奏してゐる半身像をいれた杢太郎の画風は、木村さんを大変感心させもしたに違ひない。

ともかく「パンの会」の研究に没入してゐた私は、この木村さんの「パンの会」の記録画とも云ふべき作品に注目してゐたので、この作品を中心に木村さんとの接近がいよいよ密になつたと云つてよい。私の「パンの会」（「日本耽美派の誕生」）が本になることになると、千葉県の人が持つてゐた木村さんの「パンの会」を原色写真の口絵にしたのは云ふまでもない。

私にとつて因縁浅からぬ「パンの会」も出品されるといふわけで、木村さんの遺作展には人知れぬ執着を私は感じてゐた。いよいよ会場に入ると大変な人だかりで、木村さんの藝術がどんなに人気があるかがよく判つた。私はその群集の間を縫ふやうにして、油絵や日本画といろとりどりな遺作を、一つづつ観て廻つた。油絵では何と云つても「パンの会」があらゆる意味ですぐれてゐる。それと、昭和七年第十回春陽会出品の百五十号の大作「牛肉店帳場」が、とくに私の眼をとらへた。この絵は木村さんの家で観たことがあつた。木村さんは明治・大正の東京で有名だつた牛肉店「いろは」が実家であつたから、その絵は自家の表口の方を人物風俗を入れ

て描いたものだが、ただ描いたといふだけでなく、作者の心が全面にしみついてゐるやうで、画面の隅の方に若い木村さんの眼がかがやいてゐるのを感じさせる作品である。油絵の技法からみて問題となる作品は他にまだ沢山あるし、ことに晩年のかすれたやうな油絵には、作者が油絵から次第に離れてゆく自己の本質を意識した、懸命な執着のやうなもの、その痛みから滲み出た青い血のさみしさが感じられる。さういふ感じを受ける私には、だからどれも離れがたい絵ばかりだつたが、日本画風の作品になると木村さんの筆はずつと自由で軽快になり、たのしくなり、豊かになつてゐた。日本画といつても、木村さんの独特な絵で、それはまた挿絵藝術とも関聯をもつてゐる。

誰でもが異口同音に木村さんの藝術として絶讃を惜しまないのはこの挿絵であらう。とくに永井荷風の「濹東綺譚」の挿絵は、近代文藝の挿絵としても最高のものとされてゐるし私もまたそれを疑ふ者ではない。荷風もまたかつての「パンの会」の一人であつたし、木村さんが荷風の耽美主義的な文学によつて挿絵の完璧を極めたとしても不思議ではないのである。しかし、もともと彩管をとる文士とでも云ふやうな風があつた木村さんの文藝挿絵を、単なる生活上の余戯でなく本質的な藝術にまで高めたのは何であつたらうか、と云ふことも考へて置く必要がある。遺作展を観てゆくうちに、私はそれが樋口一葉であり、一葉の「たけくらべ」ではなかつたかと云ふことをしみじみと感じさせられた。出品の日本画の中に大正十五年から昭和二年にかけて木村さんが精魂を打ちこんだと思はれる「たけくらべ」絵巻三巻があつた。これはまことに驚歎すべき努力の作品であり、私は思はず幾度かためいきをもらしながらその前に立ち続けた。かつて蕪村が描いた芭蕉の「奥の細道」絵巻を観たことがあるが、私は木村さんの「たけくらべ」絵巻から蕪村の「奥の細道」絵巻をすぐに思ひ出した。蕪村が芭蕉を畏敬したやうに、木村さんも一葉を畏敬したのであらう。畏敬したと云ふよりも、東京の下町といふ身にしみた生活の場に於て、木村さんは一葉の全身にひどく共鳴したと云ふべきであらう。木村さんの「たけくらべ」絵巻はその後の文藝挿絵の原典とも云ふべきもので、藝術としては蕪村の「奥の細道」絵巻と同様に、日本の重要な文化財として、文藝絵巻として永久に保存さるべき性質のものではあるまいか。私はまた木村さんの絵巻に感動を覚えたことから、逆に一葉の文学「たけくらべ」の古典性といふことを更めて考へさせられるやうになつた。文章や字句の面からばかり一葉をとやかく品さだめしても、一葉の全人格から花ひらいた「たけくらべ」の真意といふものは到底摑めない。それを木村さんが絵画をとほして、新しい角度から一葉の大切な或る一面を示唆してくれたやうに私は思ふ。

私は木村さんの綜合的な遺作展を観たことは大変よかつたと思ふ。木村さんには木村さんの癖もあつて、その絵を下町趣味として甘つちよろいと評する人もないではない。しかし、これほどはつきりと人間臭と共に藝術をさらけ出した人はま

ことに稀である。私のやうに江戸ッ児の木村さんとはまるで違つた田舎者にも、その甘つちよろいと云ふ藝術が、下町とか山の手とかのかかはりなしに卒直にきびしく胸を刺すのである。決して甘つちよろいと云ふやうな木村さんの藝術ではない。

話はまた元に戻る。私が「パンの会」の研究資料を蒐めはじめた頃から、木村さんは我事のやうにいろいろと私に心をくだいて呉れた。そして折あるたびに記憶の中で気づいたことや、捜しあてた文献などを報せてもらつた。自分に直接関係もすくない、そして他人のつまらぬ研究にこれほど力を入れるといふのは凡人のやれることではない。私の「パンの会」が思ひがけなくも本になつたとき、私はこの半分の力は木村さんのおかげだ、木村さんとの共著のやうなものだとさへ思つて、感謝の意を捧げた。木村さんの手紙や葉書は、そのままが木村さんの藝術と云つてよいほどのものである。とくに自分の油絵の「パンの会」について、その絵葉書を中心に細々と書き込まれたものなどは、木村さんの美術と文学と研究心とが渾然として、その親切な人柄に包まれた「絶品」として、私は大切に蔵つてゐる。

「パンの会」の研究が一応終りかけた頃、私は東京の廃墟の中を歩いて「新東京文学散歩」といふ本を書きはじめてゐた。まだ私はその資料を撮るために写真機を使はない頃で、はじめは石版画家の織田一磨翁と同行しながら、その本のためのスケッチを描いてもらつた。織田一磨翁とは私の「パンの会」が出版されたとき、突然お祝ひの葉書をもらつたことから親しくなつたが、かつての「パンの会」の一人でもあつて、私はまもなく「パンの会」を改訂増補して「日本耽美派の誕生」を出すやうになつたとき、織田翁から数々の貴重な資料を出してもらひ、その増補版の装幀もしてもらつた。「新東京文学散歩」が意外にも好評だつたので、私はその続編を出版することになつたが、そのときは木村さんと一緒に東京をめぐつてスケッチをしてもらひ、それを続編の挿絵にした。私の「新東京文学散歩」正続が織田一磨、木村荘八のスケッチによつて飾られてゐるといふことは、私の文学地理の考証をふくめた文学はほろびても、尚この本は将来に於て珍重されるといふことではないかとさへ思つてゐる。

この「新東京文学散歩」の執筆にかかつた頃から、木村さんはまたいろいろと私に協力を惜しまれなかつた。とくに明治時代の東京の風土やその他の事情を調べてゐるときは、次次に貴重な地図やスケッチや摸写などが手紙になり葉書になつてとどけられた。そして最後に木村さんの仕事を私の著作に飾つてもらつたのは、「瓦斯灯文藝考」を執筆したときである。これは東京瓦斯会社の創立七十年記念の社史に入れるのが当面の目的だつたが、その編纂者の内藤邇氏がまた非常な木村さんの藝術の理解者でもあつたから、私が脱稿するとすぐに木村さんに瓦斯灯の貴重なスケッチの挿入を依頼した。しかし木村さんは依頼されるといふ受身でなく、私の拙ない研究に積極的に幾枚ものスケッチを提出されたのであ

る。このスケッチの一部は昨年末に出版した私の東京文学散歩の決定版「下町」上巻に挿入させてもらつたが、そのときはお互ひに忙しくて訪ねることもできなかつたので、葉書で用を足した。その返事の葉書が私への最後のものになるなどとは、少しも考へなかつたのである。

その便りを往復してからまもなく、昨秋の大台風となつた。台風の日に私は犬吠岬にゐて、翌日の夕方水害の中を東京に辿りつくと、その足で早稲田大学で催される予定になつてゐた或る会合に出席した。そこで久しぶりに木村さんと会つた。私が行つたとき木村さんは丁度銀座についての講演中で、すぐに話しかけもできなかつたので、私は木村さんの横に腰かけてしばらくそれを聴いてゐた。やうやく終つて又次の人が喋りはじめた。私はその折ちよつと久濶をのべただけで、話は次の講演が終つてからゆづくりできるつもりだつたが、木村さんは話を終るとまもなくポケットから名刺を出して、それに何やら書きはじめた。私はだまつてそれを見てゐた。すると木村さんはすつと立ち上つて、私にその名刺をさし出し、小声で「またゆつくり話しませう」と云ひながら講演の邪魔にならぬやうに会場を忍び足に出てしまつた。私がもらつた名刺には「漸く東京繁昌記が出ることになります、今校正してゐます、今日アト約束があるので間もなく中座します、いづれ万々、出版は十一月でせう、演劇出版社」と鉛筆の走り書きがしてあつた。

木村さんの後姿がげつそりとやつれて、肩のあたりが怒つたやうに尖つてゐるのが妙に印象的だつた。「東京繁昌記」出版のことを私はこのときはじめて知つた。しかしそんな仕事がしたい木村さんであつたことは、云はれなくとも私には判つてゐた。これが最後のめぐりあひになるなどとは考へないので、私は木村さんを、そつと見送つただけだつた。

木村さんは「東京繁昌記」の仕事で無理に無理を重ねながら、つひに倒れてしまつたのである。木村さんが倒れてしまふと、もう誰も私に木村さんのことを報せてくれる人もなかつた。ただその後偶然に遇つた中川一政さんから、木村さんの病状が危篤状態だときいて、ひどく驚いただけだつた。

新聞で悲報を知つて私は木村さんの家にかけつけたが、そこにも夫人のほかに顔見知りの人はゐなかつた。いや一度は木村荘太の追悼会が朝日新聞社で催されたときに会つた木村さんの異母弟妹もゐたらしいが、もう私には一人一人の顔の記憶もなかつた。その日私は出版されたばかりの自分の「下町」上巻をそつと霊前に捧げてひきさがつた。

その後追悼会などもあつたやうだが、それは藝術家の集りと云ふよりも、一部の藝能人や巷の古馴染みといつた人々の集りばかりで、私の出るやうな場所でもなかつた。私はそれを知るたびに、妙にさみしさを感じた。木村さんといふ人は小唄もやつてゐたし、新生新派などを中心に芝居にも関係が深かつた。その反面に私のやうな者ともつきあつてゐた。

ジャーナリズムにはなやかに持てはやされるほど、木村さんの影は私から遠ざかるやうで、そのために感ずる私のさみ

しさは、実は木村さん自身のさみしさではなかつたかと私は思ふ。私は木村さんに孤独感があると云つたが、その孤独感が、木村さんを趣味以上に、必要以上に他愛ない下町の俗塵に近づけていつたやうである。こんなことを云ふと、木村さんはそんな失礼なことも云つてはいかんと怒るかも知れないが、木村さんを下町好みの藝術家だとのみ決めて、その名声にちやほやしたり、マス・コミの中の自己宣伝に利用するやうな連中には、木村さんの藝術は判るまいと思ふ。下町好みは地肌であつても、藝術家としてはその向う側にあくまでも孤独にしか在り得ない木村さんだからである。